

2005年度秋学期 アンケート報告

全体の講評

池内 裕美

1. 実施状況

表1：アンケート実施状況

春学期・前期 開講科目	対象	a.科目(クラス)数	講義	外国語	体育実技	全体
		b.学生数	1,645	1,507	179	3,331
	実施	c.科目(クラス)数	201,365	51,071	5,194	257,630
		d.回答者数	1,390	1,471	174	3,035
	実施率	c ÷ a	84.5%	97.6%	97.2%	91.1%
回答率	d ÷ b	31.5%	76.3%	69.3%	41.2%	

注)「学生数」「回答者数」は延べ人数。

表2：学部別アンケート実施率・回答率

	デイ法	デイ文	デイ経	デイ商	デイ社	工	総情	フレ全	保健体育	計
実施率(%)	87.9	93.3	95.7	94.0	95.7	89.7	85.4	85.2	96.3	91.1
前学期比	-0.1	-0.5	0.1	-0.3	0.5	0.4	2.0	-4.3	-0.2	-0.2
回答率(%)	33.6	50.1	39.3	36.4	41.0	41.9	42.3	41.4	67.0	41.2
前学期比	-6.7	-8.3	-7.3	-5.7	-5.8	-7.3	3.3	-5.7	-7.6	-5.9

注)「デイ」とはデイトタイム・コース&第1部「フレ全」とは全学部のフレックス・コース&第2部を意味する。
また「前学期比」とは2005年春学期との差である。

表1は、2005年度秋学期・後期の授業評価アンケート実施状況を示したものである。実施率はアンケートを実施したクラスの割合を表し、回答率は学生の延べ人数によって算出した。実施率は全体で91.1%であり、ほとんどの科目でアンケートが行われているものの、回答率となると41.2%となり、これは調査該当学生の約4割の協力しか得られていないことを意味している。

また、表2は学部別の実施率・回答率を示したものである。これをみると、実施率・回答率ともかなり学部による較差があるのが分かる。特に回答率の差が大きく、保健体育を除いた中で回答率がトッ

プの文学部と最下位の法学部とでは、16.5%もの開きがある。また前学期比においては、総合情報学部以外の全ての学部で回答率が軒並み減少しているのが特徴的である。

授業評価アンケート調査は今回で通算11回目となるが、体育実技に関しては第6回目から独自の質問紙による調査を実施している。図1に実施率と回答率の経年変化を示した。実施率は各回を通して概ね高水準で安定しているものの、全ての回において講義科目が他の科目群に比べて幾分低くなっている。また、講義科目、外国語科目および体育実技を合わせた全体の回答率は、41.2%であり(表1

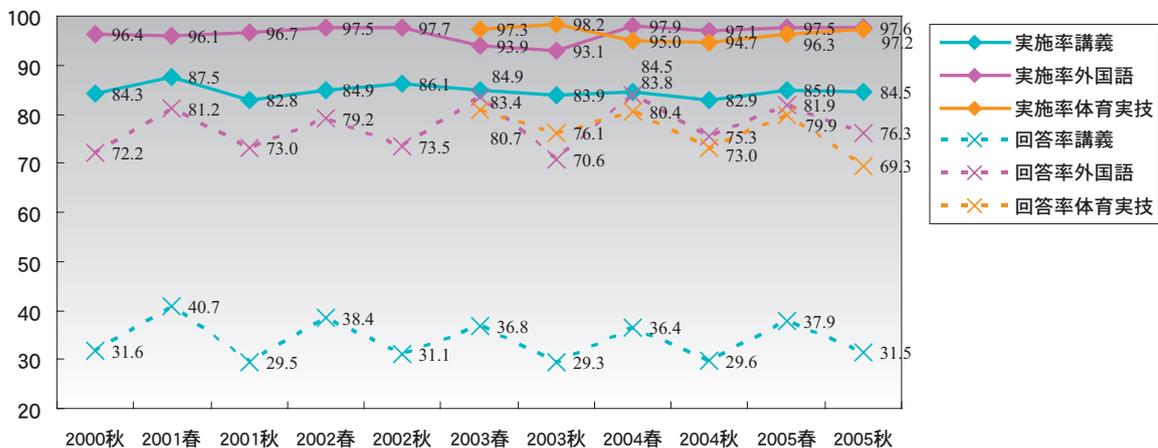


図1：授業評価アンケート実施率、回答率の変化

参照)、これは2005年度春学期の調査結果(47.1%)に比べて5.9%の減少となっている。表2の結果や経年変化全体を通してても秋学期の回答率が例年かなり減少しており、これは履修登録をしたものの春学期である程度単位が揃ってしまったために受講を放棄した学生に一因があると考えられる。

2. 全体的傾向

全学の3,331のクラスについて、延べ257,630人を対象とする「学生による授業評価」アンケートの結果がえられた。共通質問項目は12項目で、「⑤強くそう思う、④そう思う、③どちらとも言えない、②そう思わない、①全くそう思わない」の5件法で評定する。データの集約は、次のような手続きで行った。まず質問項目ごとにその項目に属する全クラスの個々の評定平均値を、0.5の値の間隔でグループ化し、8つの評価段階に分類する。そして、その8つの評価段階に対して、A+(5.0～4.5)、A(4.5～4.0)、B(4.0～3.5)、C(3.5～3.0)、C-(3.0～2.5)、D(2.5～2.0)、E(2.0～1.5)、E-(1.5～1.0)というラベル付けを行った。なお、境界の値は上の評価段階に入れた。

図2は質問項目ごとにクラスの評価平均値の分布(割合)を示したものである。質問項目は評価平均値の大きさに基づき、評価の高い項目が上の方に、評価の低い項目が下の方にくるように並び替えられている。「出席(10)」に関する質問の評価平均値が極めて高く、約92%のクラスでA以上の評価を得ていることから、これらの結果は出席率の高い学生による評価であることが前提となる。

項目ごとに結果を見てみると、「声(3)」、「要項(1)」、「学生からの質問(7)」、「教科書(5)」、「熱意(4)」、「教室の広さ(12)」の6項目については、評定平均値B以上のクラスが約90%を超えており、

特に「声(3)」においては75.7%ものクラスがA以上と評価している。また「知識・能力(9)」、「満足(8)」、「工夫(2)」の3項目は、評定平均値B以上のクラスが85%前後となっている。特に「満足(8)」、「工夫(2)」、「教材の提示(6)」の3項目においては、C以下のクラスの割合が2005年度春学期の結果に比べて5%以上も減っており、全項目を通して前回の2005年度春学期の調査結果より高い評価を得ていた。これらの結果は、教員の授業への取り組みに対する努力や工夫が、学生にも伝わりつつあることを示唆しているといえよう。

一方、受講生自身の授業に臨む姿勢や成果に対する自己評価は、どのようなものであったろうか。例えば、「11.あなたは予習・復習するなど、この授業に意欲的に取り組みましたか」については、48.2%のクラスがC以下になっているが、これは前回の結果(50.5%)に比べると2%近く減少している。また、「9.この授業を通じて、知識が深まった、能力が高まったと感じますか」といった成果を問う質問の評定平均値については、B以上のクラスの割合が前回の81.2%から今回85.4%と、約4%も増加している。この結果を見る限り、教員の努力が身を結び、学生の学習意欲や成果の向上に少なからず効果をもたらしていると考えられる。

しかし、授業評価に対する得点が全体的に向上したからといって、必ずしも教員側が意識して授業改善を実施しているとは言い切れない。後にも述べているが、春学期と秋学期ではそもそも回答者側、つまり学生側の性質が異なっている可能性も考えられる。したがって今後は、授業評価アンケートの目的や存在意義を再確認するためにも、各教員が毎学期の授業評価アンケートの結果を、どの程度授業改善の参考にしているのか検討する必要がある。

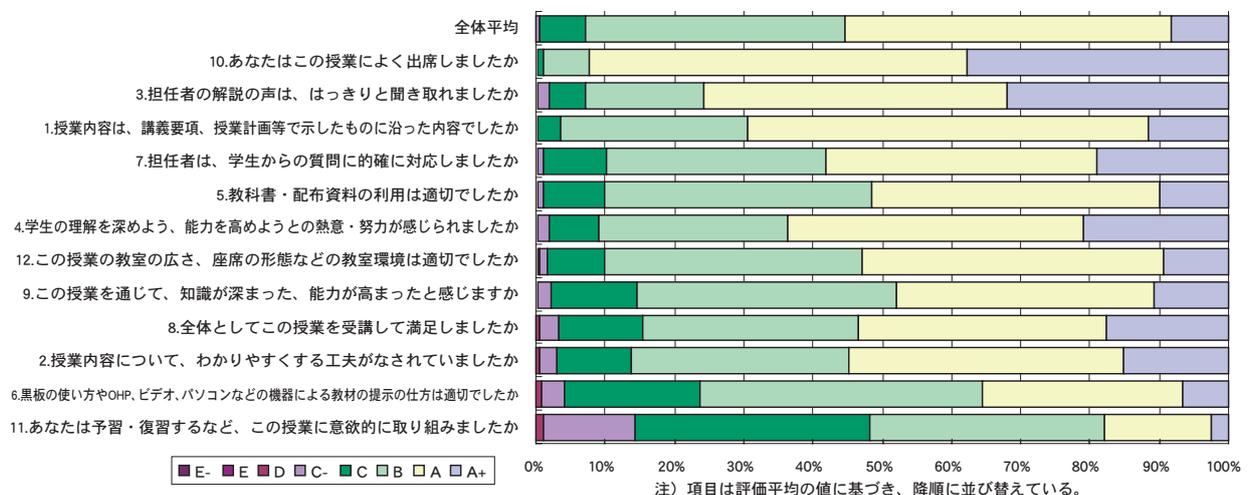


図2：各項目についてのクラスごとの評価平均の分布

3. 学部比較

表3は、質問1から質問12までの項目に対して、各学部におけるクラス評価平均値と標準値3.0との差を学部ごとに示したものである。

項目(1)～項目(7)までの質問は、授業スキルに関するものである。これらの質問に対しては、全学部を通じて標準値3.0よりかなり良好な評価を得ているといえよう。また、2005年度春学期調査の結果と比較すると全体的に上昇傾向がみられ、特に社会学部では3項目、法・文・工学部では2項目において一段階ずつ評価が上がっている。また項目別にみると、「工夫(2)」においては4学部、「熱意(4)」においては3学部の評価が前回に比べて上昇している。

項目(8)と項目(9)は、満足や能力の高まりといった学習成果に関するものである。これらに対する評価も前回調査よりかなりの上昇がみられ、「満足(8)」では4学部、「知識・能力(9)」では3学部において一段階ずつ上がっている。

項目(10)と項目(11)は出席や学習意欲に関する項目である。出席に関しては、経済学部のみ一段階低下しているものの、全学部において非常に高い評価が得られている。一方、「意欲(11)」においては2004年度秋学期から3期連続して全く変化がなく全体的に他の項目に比べて評価が低い。特に社会学部の平均値は全学部・全項目を通じて唯一標準値3.0を下回る結果となっており、これは2003年度春学期調査から6期連続してみられる傾向である。

最後の項目(12)は教室環境に関する質問である。こ

の項目においては、文と商の2学部において一段階ずつ評価の上昇がみられた。

このように今回の結果は、前回に比べて全体的にかなり高いものとなっており、特に1~12項目を通しての全体平均は前回3.5から今回3.9と0.4も上昇している。しかし実のところ評価が上がった項目のほとんどは、前回2005年の春学期で評価が下がっていた項目である。それゆえ“評価が上がった”というよりも、むしろ前回の評価がかなり悪く、今回その分を取り戻したに過ぎないと考える方が妥当かもしれない。

しかし春学期よりも秋学期の方が、相対的に評価が高くなる傾向にあることは否めない。その一因としては、秋学期はいつも回答率が低い（出席率が低い）ことから、勉学に積極的な学生が調査対象により多く含まれている可能性が挙げられるであろう。そうすると自ずと講義内容や受講態度に対する評価は高くなり、春学期に比べて秋学期の評価得点を引き上げることになると考えられる。

さらに評価全体を学部間で比較してみると、総じて法、文、社会学部、外国語教育研究機構の得点が高く、工、経済、総合情報学部の得点が低くなっている。これはここ数回の調査に共通してみられる特徴でもある。しかし毎回のことながら、「(10)出席」に対する評価は高いが「(11)意欲」に対する評価は低くなっている。このことから、ただ知識を与えるだけでなく、いかにして学生が講義をもとに興味や問題意識を抱き、積極的に自主学習に取り組むよう仕向けるかが、授業改善を考える上でより重要になるといえよう。

表3：学部ごとのクラス評価平均の標準値 3.0 からのずれ

	法	文	経	商	社	工	情	外	全平均
1.授業内容は、講義要項、授業計画等で示したものに沿った内容だったか	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○	4.0
2.授業内容について、わかりやすくする工夫がなされていたか	○○○	○○○	○○	○○	○○○	○○	○○	○○○	3.8
3.担任者の解説の声は、はっきりと聞き取れたか	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○	○○	○○○	○○○	4.1
4.学生の理解を深めよう、能力を高めようとの熱意・努力が感じられたか	○○○	○○○	○○	○○○	○○○	○○	○○	○○○	3.9
5.教科書・配布資料の利用は適切だったか	○○○	○○○	○○	○○	○○○	○○	○○	○○○	3.9
6.黒板やOHP、パソコンなどの機器による教材の提示の仕方は適切だったか	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	3.6
7.担任者は、学生からの質問に的確に対応したか	○○	○○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○○	3.9
8.全体としてこの授業を受講して満足したか	○○○	○○○	○○	○○	○○○	○○	○○	○○○	3.8
9.この授業を通じて、知識が深まった、能力が高まったと感じるか	○○○	○○○	○○	○○	○○○	○○	○○	○○	3.8
10.この授業によく出席したか	○○○○	○○○○	○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	4.4
11.予習・復習するなど、この授業に意欲的に取り組んだか	○	○	○	○	▼	○	○	○○	3.3
12.この授業の教室の広さ、座席の形態などの教室環境は適切だったか	○○	○○○	○○	○○○	○○	○○	○○	○○○	3.8
1~12の全体平均	○○	○○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○○	3.9

ここでの学部は、授業を担当する専任教員の所属学部と非常勤講師などの推薦母体となった学部（教養・体育実技・教職に関する科目だけの担任者は文学部）である。クラス評価平均値の標準値3.0からのずれを0.4きざみに図表化したもので、○一つにつき一段階上り、▼一つにつき一段階下る。



2005年度春学期調査（第10回調査）結果より○が減ったことを表している。
2005年度春学期調査（第10回調査）結果より○が増えたことを表している。

4. 今後の課題：アンケート項目の再検討

2004年度秋学期（第9回調査）より、アンケートの質問項目はそれまでの21項目から統合、削除によって大幅に減少した。削除の理由は、項目の中には全学的に該当しないもの、内容が重複しているもの

などが多く含まれていたことなどが挙げられる。そこで幾度となく検討を行った結果、各学部共通項目を12項目に絞り、その代わりに学部あるいは個々の授業ごとに自由に質問項目（最大5項目まで）が

設けられるように改変した。しかし依然、「授業評価アンケート」には、項目内容に対する不信感や毎回調査を実施することの意味、調査自体の存在意義など、多くの問題点が教員側から挙げられている。そこで今回は、少し統計的な手法（因子分析）を用いて、項目の適切性について検討を試みた。

因子分析とは、調査項目間の関連性から潜在的な次元（因子）を発見するための手法であり、この分析を用いることにより12項目ある質問項目をいくつかのグループに分類することが可能となる。当初、これら12項目は質問(1)～(7)までは「授業スキル」、項目(8)と(9)は、満足や能力の高まりといった「学習成果」、項目(10)と(11)は「学習意欲」、そして項目(12)は「授業環境」を測定することを意図して作成されたが、結果は表4の通りである。なお分析にあたっては、アンケートを実施した3,035科目の中から200科目を、学部や受講者数が偏らないよう層化した上でランダムに抽出し、それらの項目ごとの平均値をデータとして用いている。

表4：調査項目の分類（因子分析結果）

項目	I	II
Q2. 工夫	1.056	-.133
Q8. 満足	.940	.008
Q4. 熱意・努力	.921	.038
Q1. 授業内容	.863	.042
Q9. 知識・能力	.845	.083
Q3. 担当者の声	.827	-.018
Q6. 教材の提示	.798	-.085
Q5. 教科書	.727	.138
Q7. 学生からの質問	.722	.140
Q11. 意欲	-.069	.866
Q10. 出席	-.014	.580
Q12. 教室環境	.208	.487
因子間相関		.610

主因子法。数値はプロマックス回転後の因子負荷量。信頼性係数は因子 I : $\alpha = .964$ 、因子 II : $\alpha = .679$ 。

表4に示された結果をみると、各項目は意図したようには分類されず、(2)、(8)、(4)、(1)、(9)、(3)、(6)、(5)、(7)からなる「I. 授業スキルと成果」を測定する項目群と、項目(11)、(10)、(12)からなる「II. 学習意欲と環境」を測定する項目群に大別されることが明らかとなった。このことは、質問項目が12項目もあるにも関わらず、非常に限られた側面からしか授業が評価されていないことを示唆している。また、因子「II. 学習意欲と環境」においては、特に「(10)出席」と「(12)教室環境」の因子負荷量の値（ある項目がその因子に所属する程度）が相対的に低く、因子を構成するのに最適な項目とはいいがたい。したがって、当初想定していたような、より多様な側面から評価が可能となるアンケートを目指すならば、やは

り項目のさらなる見直しを図ることが今後の課題となろう。そのためには、まず授業の良し悪しを評価するには、どういった側面が考えられるのか、そのあたりから再検討する必要があると思われる。

5. 補足：受講生の人数別にみた授業評価

なお、因子分析をもとに受講生の人数の違いによって「I. 授業スキルと成果」と「II. 学習意欲と環境」に対する評価が異なるか否か検討した。具体的な方法は、受講生の数の平均値(約51人)によって上記200科目を受講生52人以上の多群(64科目が該当)と51人以下の少群(136科目が該当)に分け、群ごとに各因子の評定平均値を算出し、その差が統計的に意味のあるものかを検定した(t検定)。なおここでの評定平均値とは、“各因子に属する項目の平均値の合計÷項目数”、例えば因子Ⅱだと“(項目(11)の平均値+項目(10)の平均値+項目(12)の平均値)÷3”で算出する。この得点をみることにより、受講生多群と少群の間で因子ごとの評価が比較可能となる。

結果は、因子Ⅰ、Ⅱのいずれの平均値においても受講生の数による差が認められた(いずれも1%水準で有意となったが統計的な記述は省略する)。より具体的には、「I. 授業スキルと成果」の評定平均値は受講生多群が3.71(標準偏差=.37)、少群が3.92(標準偏差=.38)、「II. 学習意欲と環境」の評定平均値は受講生多群が3.68(標準偏差=.21)、少群が3.82(標準偏差=.32)となった。これらの結果は、受講生が少ない科目の方が相対的に授業に対する評価が高いことを示している。ある程度、予想はしていたものの、ここまで歴然とした差が生じるとは驚きである。受講生が多くなるとどうしても一方通行の授業になり、細やかな指導が難しくなるのは否めない。しかし学生の満足度や意欲を向上させるためには、e-LearningシステムやTA・SAの活用などによって、よりきめ細かい授業支援体制が、特に大講義において必要なことを、これらの結果は示唆しているといえよう。

(FD部門・授業評価部門委員会委員)

